特集

中野ひな市

～北信州の春の風物詩～

北信州に春を呼ぶ「中野ひな市」。毎年、中野土人形（中野人形・立ヶ花人形）の即売会には全国各地から大勢の人が訪れ、長蛇の列を作ります。

中野土人形は「土びな」と呼ばれ、古くから親しまれてきました。流入経路も特徴も異なる2つの系統の土人形が、昔ながらの伝統技法で現在も同一地域で作られている例は全国を見ても類がないといわれています。

▲抱き熊金太郎

▲だるま恵比須

▲ふぐ乗り大黒

奈良家の中野人形

京都伏見系の流れをくむ奈良家の「中野人形」は、教訓説話物や風俗物などを中心に約百数十種類余りが制作されています。小型の童子ものが多く、可愛らしい表情は見る者を和ませます。

奈良家五代目　奈良久雄（ならひさお）さん

奈良家六代目　奈良由起夫（ならゆきお）さん

1

2

1_これまでに二度、年賀切手の図柄に採用されている中野人形。昭和56年には「豊年どり」（左）、平成27年には「ひつじ」（右）が採用された。

2_2月13日、奈良家六代目・由起夫さんが新作の土人形「中山晋平」（左）と「高野辰之」（右）を市に寄贈。「中野市にゆかりがある人形を」と由起夫さんが型から制作。ふっくらしたシルエットで雰囲気がとても良く出ているこの人形は、市役所、中山晋平記念館、高野辰之記念館、日本土人形資料館に展示中。中野ひな市の展示即売会にも出品される予定。

西原家の立ヶ花人形

愛知三河系の流れをくむ西原家の「立ヶ花人形」は、歌舞伎物が多く、現在50種類余りが制作されています。武者物は、いかにも強そうな表情で、人の心を引きつけます。

西原家五代目　西原久美江さん

1＿西原家では初代・己之作の頃に内裏雛が作られていたが、昭和初期までに型が紛失。惜しまれる状況が続いていた。土人形ファンからの長年の要望に応え、昨年、五代目・久美江さんが型を新たに制作。今年の新作として中野ひな市の展示即売会にも出品される。

2＿切れ長の目、鮮やかな色彩が立ヶ花人形の特徴。着物の模様は久美江さんが丁寧にデッサンして描いたこだわりの仕上がり。

▲八重垣姫

▲政岡

▲関羽

中野土人形の歩み

◆**文化年間（1800年代前半）** 行商人であった奈良家初代・栄吉が京都伏見から人形型を持ち帰り、伏見の人形師夫妻を中野に移住させる。伏見人形の製法を習い、中野ひな市で土人形を販売。

◆**明治6（1873）年** 太陽暦の実施に伴う太政官布告により五節句が廃止に。中野のひな市も中断。

◆**明治10（1877）年ごろ** 奈良家二代目・豊吉や中町天龍屋商店が協力し、ひな市が復活。

◆**明治35（1902）年ごろ** 安源寺で屋根瓦を焼いていた西原家初代・己之作が、三河（愛知）の瓦職人・斉藤梅三郎の指導で冬期の副業として土人形づくりを始める。

◆**昭和17（1942）年ごろ** 戦争により材料難となり、ひな市から土人形が姿を消す。人形制作は中断。

◆**昭和32（1957）年** 奈良家四代目・政治が土人形制作を再開。作品は主に東京で販売される。

◆**昭和34（1959）年** 奈良家五代目・久雄の大物（ふぐ乗り大黒など）が、ひな市に出品され完売。

◆**昭和46（1971）年** 西原家三代目・袈裟慶が立ヶ花人形を40年ぶりに復活。翌年からひな市へ出品。

◆**平成17（2005）年** 中野人形の技法が、中野市無形文化財に指定される。

◆**平成20（2008）年** 奈良家六代目・由起夫が土人形の制作を始める。

《参考文献》日本土人形資料館発行「中野の土人形」